
『魔術師』

胡麻味噌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『魔術師』

【Zコード】

Z0368A

【作者名】

胡麻味噌

【あらすじ】

魔術師『朝倉恭子』は連続殺人事件の首謀者を捕まえるように依頼される。そして彼女は数々の手がかりを得て一つの廃墟ビルにたどり着く・・・

第一話【決戦當日】

「うーーーーーーか。」

それは静かく、そして重い一言だった・・・その言葉を、一人の女子高校生が発したとは誰が思つただろうか。

白い肌に漆黒の長い髪、その色合いが彼女を妖しく際立てる。

全てを見透かすような少女の紅い目が先に廃墟ビルが佇んでいた。この町は大都市であるのだが不思議とそのビル以外に高くそびえ立つものは周辺にない、まるでそのビルがこの地区の指令塔のように少女を見下ろしている。

時はすでに真夜中、日が替わるつとしている。

本来普通の高校生なら今頃こんな場所を徘徊するわけがないだろう。

・・そう、彼女は『普通』ではないのだ。

「ちつ！」

彼女の舌打ちがむなしく鳴る。

それは、わざとでなく思わず出たものだつた。

『奴等』^{テロイター}の領域に入つてから吐き気がしている。

この廃墟ビルの周辺に来てからそれは一層高まつた。

「聖でも連れてこれば良かつたかしら・・・」

今更同業者彼を連れてこなかつたのを後悔しても遅いのだが、後悔するほど彼女にはこの領域は居心地が悪いものだつた。

「まあ、今までサボつてきた私のせいだし、しようがないか。」

目を閉じ決意を決めた彼女・・・いや、魔術師『朝倉 恭子』は廃墟ビルへ駆け出した。

廃墟ビルの中は何年も使つてないかを物語るように床にはホコリがたまり、壊れた椅子やら机やらが散乱している。

学校の教室ほどしか広くないはずなのに果てしなく『闇』が広がっているように感じた。

まるで宇宙に放り出されたようなどこまでも広がる『闇』・・・『

光』といえば窓から差し込む月明かりぐらいである。

その微々たる『光』は今にも消え入りそうだ。

「は～・・・さすが、黒魔術師といったところね。」

『闇』は黒魔術の象徴だ。

まさにこの光景は『奴等』の力量を物語つてているのは間違いなかつた。

「予想外だわ・・・委員会は簡単な仕事とか言つてたはずなのに、こりや、はめられたわね・・・」

彼女の右手に魔力がこもる、紅い炎が右手全体を覆うようにしてうごめく。

彼女の目がなにか『生き物』をとらえた時に・・・

そう、全ては一週間前の電話から始まった。

第一話【連続殺人事件】

『魔術師』彼らは悪魔や天使や自然界から力を得て『魔術』たるものを使っている。

悪魔から力を借りるのは『黒魔術』 天使から力を借りるのは『白魔術』そして、自然界から力を借りるのは『精靈魔術』と呼ばれている。

『魔術』はその強大なる力、故に悪用する者も多々いる。

そして、それらを取り締まるのが『螺旋委員会』と呼ばれる組織である。

魔術師『朝倉 恭子』もその一員である。

（一週間前）

彼女の住む町には大都市には似合わない小さな丘がある。

その頂上に設立されたのが『春風高校』である。

有数の進学校であり制服もそこそこかわいい。

唯一の弱点といえば学校に向かう途中に大きな上り坂があることぐらいだろうか。

環境に恵まれなかなか良い学校ということで近所に知れ渡つている。

彼女もこの学校の生徒だ。

『キーンゴーンカーンゴーン』

4限目の授業もようやく終わり昼休みに入れる。

私の昼休みの使い方はいつも決まって隠れて『魔術』の研究である。現代社会においてメジャーなのは『科学』で『魔術』ではない。

現時点において『魔術』を認知しているのは少数の人だけだろう。・と、いうわけで隠れて研究に没頭しないと後々面倒になるのだ。

それに委員会も『魔術』が一般に知れ渡ることを許さない。

私は、昼食をすませ体育館の裏に行こうとして席を立とうとしたとき「きょーこちやーん！」

教室に響きわたるほどひときわ大きい声を張り上げる彼女は『橋ちさき』。

なかなか、かわいい部類に入り特に彼女は誰にでも心を開くのでクラスの人気者となっている。

私的にはあまり好きではないのが正直なところだ。

「あら？ なにかしら【ちさき】さん？」

私は感情のこもってない作業的な挨拶をする。

それを知つてからはずか彼女は話を続ける。。知らずか彼女は話を続ける。

「恭子ちゃんつー、ビックニーユースだよつー最近起つてる『連續殺人事件』の事知つてるよね。」

私は基本的にニュースなどを見る事はないのだが、この事件のことは知つていた。

街頭のテレビでニュースが流れているのを見たことがあるし、それに学校では担任が生徒達に注意を呼びかけていたからだ。

ほんの1週間前から始まつたこの殺人事件。

もちろん殺人事件なのだから人が殺されている。

だが、一つ不可解なことがある、被害者にある者がなくなつていてるのだ・・・そう、『骨』が・・・この事件の不可解なことは被害者

の体内から骨が全くなくなっていることなのだ。

今までに4人殺されているが全て例外はない。

警察も殺された被害者の共通点がそれぐらいしかなく他に見あたるものがないので捜査もお手上げ状態だという噂だ。

「ええ、知っているわ。で、ビックニュースていうのは何なの？」

私は、その『ビックニュース』とやらに興味がわいたので聞き返してみる。

「実は、今日の朝、5人目の被害者が出たんだよつーこれは、まだニュースにもでてない情報だよー」

彼女は、

「どうだ！」

と言わんばかり態度で自慢する。

彼女の父親は警察官で、この情報を知っていてもおかしくない。

「ふうん・・・

期待していたほどではなかつたそのビックニュースは、私を落胆させた。

その態度を見て不服なのか、彼女は

「『ふうん』って・・・、それだけつー? 他のみんなは、かなり驚いてたのにつー! 恭子ちゃんは驚かないの! ?」

「そうね・・・、私が期待していたほどなかつたらね。そういう反応になつてしまつるのは仕方がないわ。」

昼休みも15分過ぎ、あと終了まで30分間しかない。

このままだと、彼女は私が驚くまで話し続けるだろう。

それは、かなり避けたいことである。私は、先手必勝とばかりに

「ところで、ちさきさん? 私、用事を控えておりますの。もうそろそろよろしいかしら?」

彼女は、焦った様子を見せ謝つてくる

「あつーごめんねー!」

「いえ・・・それでは。」

私は軽く挨拶し席を立つ

「じゃあね~」

ちわきの明るい声が教室に響きわたる、私はその声を背中で聞き教室を後にしてた・・・

第二話【見解】

教室を後にした私は、足早に体育館裏へと向かう。

『春風高校』の体育館はほかの高校と比べて非常に遠いのがネックだ。

休み時間が始まった瞬間から素早く着替え、駆け足で向かわないと次の授業に間に合わないほどである。

地理的条件でしじょうがなく遠いところに建造したらしいが、それは私にとって好都合だった。

実際、遠いところにある体育館は体育の時間以外に滅多に人が通らないということと校舎の窓から体育館が見にくいという私にとってこれ以上にない最高の『研究所』となっている。

私は、自宅から持ってきた数十本のろづそくを手に体育館裏までたどり着いた。

体育館の裏は来客用の駐車場となっているのだから校舎まで遠いということで今は使われていない。

この駐車場はなかなか広くて学校のグラウンドの半分程のスペースがとつてある。

私は、駐車場の真ん中へ行き、ろづそくを等間隔に並べ半径5メートル程の円を造る。

ろづそくに魔火をつけ真ん中に立てば私の領域テリトリーができる。

これで下準備は完了である。

あとは、昼休み終了まで研究に没頭する。

『魔術師』は領域内で初めて本来の力が出せる。

領域を造るために『きつかけ』が必要であり、それはどんな些細なことでもよいのだがその『きつかけ』の度合いが大きければ本来持つ力以上の力も出すことも可能だ。

『魔術師』同士の戦いで一番大事なのはこの領域を、いかに広く、いかに強く張るのが勝利の可能性を左右するといって過言でな

い。

しかし、あくまで可能性があるのでそれを跳ね退けて勝利を手にする『魔術師』も少なくはない・・・

「はあ～毎度毎度熱心だね恭子ちゃん？」

ふと、声が聞こえる。

声からの距離が遠くて顔は見えないが声で誰かは特定できた。

唯一『春風高校』で私の『研究』を見てよい男。

その男の名は『神坂 聖』白い髪に、白い肌『聖』という名前がよく似合う私より一回り大きいその男もまた『魔術師』である。

「うるさいっ！私が何やろうと勝手でしょっ！だいたい、貴方も毎日『』苦労様ね。こんなところに来て私の邪魔をして何か楽しいい？」第一印象は良かつたのだが、第一印象だけである。

彼も『魔術師』なので一緒に仕事をすることもある。ほんの一回助けてあげただけで、私の行くところ来るところ現れる。正直、無茶苦茶ウザイ。

2年次になつて彼と一緒にクラスになつてしまつたところから私の安息な学園生活は終わりを告げたようなものだつた。

「はあ～恭子ちゃん。そんなに邪険しないでよ～。別に君を邪魔しに来たわけじゃないんだ、ちょっと君の見解を聞きに来ただけだよ。

私は目を細める

「・・・・？見解？」

「そのとおり、今話題の

「連續殺人事件」

。君はどう思う？」

私の目の前まで歩いた彼は、腕を組みながら顔を近づけてくる。すかさず私は、一步後ろに下がる。

「そんなの聞いてどうするの？だいたい、骨がなくなつて死んでるのだから人間業じやないのは明白。『魔術』の仕業に決まってるじ

やない。あなたも、そう思つてゐんでしょう。」

「うんうん」

と彼は首を縦に振り、
「そうだ！それは間違いない！ちなみに、そんなことができるのは『黒魔術』だけ……って言つのはわかるんだが、何故わざわざ骨を抜いて殺すんだ？だいたい、『魔術』を使用したことが明白なつたら『委員会』が動くのは目に見えるだらう。『委員会』を相手にするのはめんどくさいし、実際ほとんどの『魔術』がらみの事件は『魔術』を使用したこと隠さうとするだらう？」

「うん

と唸りながら考える聖。

それを聞いた私も少し考えを巡らせる。

実際、私が関わってきた事件は『魔術』を使用したこと隠す事件ばかりだった。

考えてみると確かにおかしな話だ……『魔術』を使用して事件を起こせば、それを取り締まる『委員会』が動くのはあたりまえ。

現在、『魔術師』と呼ばれる者の大半は『委員会』に所属しているので、極端に言えばすべての『魔術師』を敵に回すことになる。

特に最強の『魔術師』と呼ばれる、黒魔術師『加賀謙三』が会長を勤めるため『委員会』に勝利するのはたやすいことではないだろう。

それとも考慮して『魔術』の使用を隠さなかつた理由、それは……

「やうしなければ、ならなかつたから……」

聖が、聞を返す。

「なにが？」

「その強氣『魔術師』は、どうしても骨を人体から取り除かなければならなかつたんじやないかしら？」

この事件の首謀者を強氣『魔術師』と命名し私なりの考えを提示する。

「ほつ・・・なら、その骨を取り除かないといけない理由は？」

「うべつー。」

確かに、それに重要な理由があるのかと聞かれたら答えがでない。てか、何で私がこんな奴の話に付き合わなければならんのだつ！
「うるさいつ！そんなの知らないわよつ！てか、邪魔しないとか言つてたけど十分邪魔してるじゃない！」

『キンコーンカーンコーン』休み時間の終わりを告げるチャイムの音が校舎から聞こえる。

「おつ！ヤベー休み時間終わりだつ！んじや、またなつ！」
と、校舎に向かって走り出す聖

「ううつと待てーーーおまえは私に対しても謝罪の一つもできんのかーーー！」

L

走り行く聖の後ろ姿に大声を張り上げて怒鳴る。

しかし、聖は氣づいた様子もなく走り去つて行く。
ため息をつく私、昼休み一つすべて無駄にした悲しさと、これから
起ることの憂鬱さに対して・・・家に帰つたら『委員会』からの
『電話』が待つてゐるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0368a/>

『魔術師』

2010年10月11日03時33分発行